

1

乳がんと生活

生活の質を高める正しい知識と情報を

乳がんは、治療後10年間という長期にわたって経過を見ていきます。治療しながら自分らしい日常や社会生活を送るためには、医療情報だけではなく、生活を支える情報や知識を得ることが必要です。

乳がんの罹患率が高い年齢は、日本では40歳代後半から70歳代です。この年代は、家庭、職場、地域でのさまざまな役割を担っている人たちが含まれます。そのため、病気にかかることによって、家族やまわりの人々への影響は少なくありません。

また、20歳代や30歳代で乳がんになってしまった人は、結婚や妊娠、仕事の継続への不安があります。

乳がんの治療は入院と通院で行われることが多いですが、病気の経過が長いいため、どのように生活や仕事とのバランスを取っていくかが重要になります。

診断治療において、高額な検査や治療が行われることがあり、金銭的にも負担が大きいです。また、乳がん治療は日々進歩しており、治療の選択肢が広がっています。そのため、どの治療を選べば良いか困惑してしまうこともあります。乳がんの治療で

は、手術療法や薬物療法による乳房の変化や脱毛などのためにボディイメージの変化が生じ、心理的葛藤を体験する方もいます。手術療法、化学療法、ホルモン療法により、外見が変わってしまったり、月経が止まったりするとセクシュアリティに影響する場合があります。また、家族に乳がんが多い場合、自分の子どもにも影響が及ぶのか、など遺伝の心配も出てきます。そのため、家族を含め、まわりの人に迷惑をかけているという自責の念や健康な人には自分の気持ちは分からないという疎外感を抱いている場合もあります。

乳がんは10年たっても再発や転移する場合もあり、病気の不安からなかなか解放されません。どのようにすれば再発を防げるのかも知りたい情報です。がんになった方がこうした問題について、情報を得ることはとても大事なことです。

また、がんになった方をまわりの方がサポートするためにも、がん患者さんの不安を知り、共感し、その対応についてまなぶことはアドバイザーとしての重要な役割です。

表24 乳がんの特徴的問題

40歳代後半から
60歳代が
好発年齢であり、
ライフサイクルの上で
社会的役割が大きい

20～30歳代の
乳がん患者は、
結婚や妊娠への
不安も大きい

術後の治療が
長期化することもある

診断過程において、
高額な検査が
行われるため、
患者の負担も大きい

治療方法の選択肢の
幅が広く、患者の
意思決定が求められる

手術により
ボディイメージの
変化が起こりやすい

手術・化学療法・
ホルモン療法により
セクシュアリティへの
影響がある

遺伝が関与する
乳がんがある

5年以降でも
再発することがあり、
10年間の経過観察が必要

